

001- 留衣

01

「留衣、留衣！ 起きろよ！」

しんと静まりかえった空間に、男の声が響きわたる。
「寝たふりをして、分かるんだぞ！ さあ、起きろったら！」
その男は、笑みを浮かべていた。

微笑みながら、泣きさげんでいる。

葬儀センターの大式場。
参列者は、大変な人数だった。
むろんだれもが、黒い喪服に身を包んでいる。

男だけが、乱れた様子の私服姿だった。
花に囲まれた壇上に上がりこみ、小さな棺にしがみついている。
読経を中断された僧が、男を優しく説得しようとしているが、まるで耳を貸す様子はない。

男の蹴倒した走馬燈が、床の上で、色とりどりの光を投げかけている。

センターの職員たちは、一様におろおろするばかりだった。
このような事態には、さすがに慣れていないのだろう。
あちこちから、すすり泣きの声が上がりはじめた。

子どもの声も、数多く混じっていた。
小学校の低学年だろうか。
親子連れの子どものが、たくさん参列している。

誰かが、壇上の男に、ゆっくりと近づいた。
その声が、はっきりと耳に届いてくる。
「そこから、離れて」

桐生直美だった。

震えてはいるが毅然とした様子で、直美は、男を見上げている。
男は、聞きわけのない幼児のように、むやみに首を振った。
「いくら呼んでも、ちっとも起きてくれないんだよ！」

男は、直美の夫の信孝だった。

直美の動きが、止まった。
小柄な身体が、異様に緊張しているように見えた。
たまりかねたのか、葬儀の導師が、直美の背中にそっと手をあてがう。

子どもが一人、わっとばかりに泣きだした。

とっても仲の良い、ご家族だったのに・・・。
近所の参列者の声を、式場で小耳にはさんだ。
直美と信孝は再婚同士で、留衣は、直美の連れ子だったらしい。

信孝は、喪主を勤めるべき父親であった。
しかし、葬儀が始まって、式場に姿を現さなかった。
娘の死を、どうしても認めたくなかったのだろう。

式の半ばになってようやく信孝は、乱れた私服姿のまま式場に入ってきた。
傍らを通りすぎるとき、なにやら、ブツブツつぶやいているのが聞こえてきた。
それから、やにわに駆けだして壇上に上がりこみ、この愁嘆場を迎えたのだ。

近くで、しきりに囁きかわす声が、聞こえてくる。

お父さん、ホントに、おかわいそうに・・・。
何がなんだか、分からなくなってらっしゃるのよ、きっと。
おかわいそうに・・・。

その電話がかかってきたのは、桐生直美と、二人きりでいるときだった。

平日の昼間で、勤務中だったが、しめしあわせて会社を抜けだし、ホテルで落ちあう。
町はずれの、うらぶれたラブホテル。
クリスマスが近いせいか、それでも無人のロビーには、古びたツリーが飾ってあった。

自分たちには、似つかわしい場所のように、思われた。
上司と部下の関係は、あるときふいに、崩れた。
すでに半年あまり、ときおり情事を重ねつづけていた。

部屋に入るとすぐに、二人とも服を脱ぎはじめた。
時間はあまりない。
半裸の直美が、ベッドに腰を下ろし、どこか淋しげな様子で尋ねてきた。

「ねえ、わたしたち、いったいいつまで、続けていられるのかな？」
「うちの会社が、つぶれるまで？」
「はぐらかさないでよ」

「どうしたんだい、きゆうに？」
「なんでもないの、ちょっとね・・・」

「なんだよ、歯切れが悪いなあ」

「ごめんなさい、最近、なんだか留衣のことが、すごく心配で」

「・・・娘さん？」

「ええ、いろいろ、気にかかることがあって・・・」

「いくつ、だったっけ？」

「7つになったばかり。そろそろ手が離れたかなあ、と思ったのに」

「それで、この仕事を始めた、とか言ってたね」

「昼間は、ご両親が見てくれているんだろ」

「ええ、でもやっぱり、私がちゃんと見ないといけないのかなあ、みたいに思えてきて」

「じゃあ、仕事をやめるつもり？」

「う～ん、まだわからない。だって、もっとお金が必要だし」

「俺に飽きたんだったら、ハッキリそう言ってくれよな」

「やだ！ そんなんじゃないわよ！」

たぶん、今年はもう逢えない、という意識があったせいだろう。

その後の行為は、互いに貪りあうような、濃密なものになった。

直美は何度も、絶頂を迎えた。

直美は、股間の突起をいじられるのが、大好きだった。

背後から抱えて、何度も突起でイかせた後、放心状態の直美にのしかかる。

そこで初めて挿入すると、直美の身体は、新たな反応を示しはじめる。

疲れきってぐったりした直美の身体を、強く抱きしめた。

別れ話に似た話をしたせいも、あったのかもしれない。

幸せそうに目をつむる直美の額は、今かいたばかりの汗で、濡れている。

「好きよ・・・」と、直美がつぶやいた。

「旦那さんより？」

「やめてよ、そんな話」

トゲのある口調だった。

こんなところで、と続けるつもりだったのだろうか。

「あ、着信・・・」

直美が、ふいに身を起こして、枕元に置いた携帯を手取る。

裸のまま、電話の対応をしはじめる直美。

たちまち顔色が、青ざめていく。

まるで生きながらに、死人と化していくように見えた。

「すぐに、帰ります・・・」

そう言って、電話を切る。

「何があった」

「留衣が。留衣が、誰かに、殺されたの・・・」

それが、4日前のことだった。

直美の娘は、何者かに強姦され、絞殺された。

死体は、自宅で発見された。

陵辱されつくした小さな身体が、ベッドの上で、冷たくなっていた。

犯人は、まだ捕まっていない。

警察はすぐさま、大がかりな捜査態勢を組んだ。

マスコミは連日、事件の報道を流しつづけている。

式場の外は、今もそれらの人員で、所狭しとあふれかえっていた。

「お父さんのお気持、私、すごくよくわかるんです」

左隣に座っていた老女が、嗚咽をこらえながら、話しかけてきた。

「私も、早くに子どもを、亡くしたもので・・・」

老女の言葉に、適当な相づちを打ちながら、あらためて直美に目をやる。

直美は、僧に支えられながら、じっと壇上の夫を見上げていた。

いまや信孝は、手放して泣きじゃくっている。

「だれがいったい、こんなひどいことを。ぜったいに、許せませんわ！」

傍らの老女は、熱心に話つづけている。

すすり泣きの声は、繰り返すさざ波のように、式場に響きわたっている。

ふと、誰かに見られているような気がした。

あたりを見まわす。

式場の壁に寄りかかるようにして立っている、大柄な男と目が合った。

気づかれたことを気にした風もなく、こちらを凝視しつづけている。

まったく見覚えのない顔だった。

刑事だろうか？

こちらに向かって、かすかに頷いたように、見えた。

ふいに男が、壇の方に顔を向けた。

式場に響いていたすすり泣きの声が、ぴたりと止む。

隣の老女が、ひゅっと息をのむ音が聞こえた。

桐生信孝が、娘の棺の蓋を、こじ開けようとしていた。
「こうなったら、むりやりにでも、起こしてやるぞ！」
鬼を思わせる、ほとんど気が狂ったような形相に、なっている。

「やめて！」

いつのまにか、あの大柄な男の姿が、壇上にあった。
信孝の肩を、しっかりと抑えつけている。
一瞬だけ抵抗を見せたが、信孝は、がっくりと首をうなだれた。

男にうながされ、信孝はおとなしく段を下りはじめた。
そのまま、式場の外へと連れだされていく。
しばらくの間、葬儀の場らしくもない、騒然とした気配が立ちこめた。

直美は、よろよろとした足取りで、僧に支えられて遺族の席に戻っていく。
ほんの一瞬、直美と目が合ったような気がした。
魂を失ったような、虚ろな表情だった。

02

導師の読経が再開すると、場内のざわめきが、ようやく止んだ。

やはり、刑事だったのだろうか。
大柄な男の姿は、すでにない。
信孝は、どこへ連れていかれたのだろう。

「おじちゃん、・・・おじちゃん！」

左隣から、声がした。
幼い女の子が、こちらを見上げている。
斜め上から、見おろす形になった。

その席には、たしか老女が座っていたはず・・・？

女の子は、真っ黒なワンピースを着て、同じく黒の膝上ソックスを穿いていた。
ただし、髪につけたリボンは、血のように真っ赤で、いささか不謹慎に見えた。
親はどうして、葬儀の日に、こんな髪飾りをつけさせたのだろう。

殺された直美の娘と、同じ歳くらいだった。
クラスメイトだろうか？
それにしても、驚くほど可愛い少女だった。

いかにも屈託のない表情で、こちらを見上げている。

抜けるような白さの右頬の上に、淡い青緑の静脈が走っている。
襟元にはうなじの線が、大胆なほど、のぞいていた。

うなじは、あまりに細かった。
簡単に、へし折れそうな感じがする。
返事をしそこねたせいもあって、思わず目を背けてしまった。

「どうして、シランカオするのぉ？」
女の子が、小声でくすくすと笑いだした。
「・・・おじちゃんが、ハンニン？」

思わず、女の子を見つめかえした。
「ヘンなカオ！」
自分の口を押さえつけるようにして、女の子は、くすくすと笑いつづける。

女の子は、ようやく笑いやむと、何気なく髪に手をやった。
「おじちゃんは、ハンニンじゃないよね」
いきなり真顔になって、少しだけ首をかしげてみせる。

「るいちゃんが、コロされるところ、みたもん」

「なんだって？」
女の子は、腿の上に手を乗せてきた。
小さな掌の温もりが、伝わってくる。

「ききたい～？」
「・・・ああ」
「じゃあ、おトイレに、つれてって」

意味が、分からなかった。

「お巡りさんには、話したの？」
何かがおかしかったが、どうしても、焦りを抑えられない。
さらに問いかけた。

「ううん」
女の子は、かぶりをふった。
「おじさんが、はじめてだよぉ・・・」

「パパや、ママには？」
女の子は、わざとらしく、ふてくされてみせた。
「しらない。どっちも、どっかにいっちゃった！」

ひょっとして嘘を、ついているのだろうか？

「ねえ、はやく、つれてってよう」
そう言って、腿にきゅっと爪先を立ててくる。
「おしっこ、したいのぉ」

(続く)

(07/12/29 更新)

女の子に乞われるまま、小さな手に引かれて、式場を抜けだした。
後ろで、巨大な扉が、音もなく閉ざされる。
式場の裏手にある、細長い廊下に出た。

えんえんと続く読経の声だけが、かすかに外に漏れでてきていた。

どこにも人影はない。
警察や報道の人間も、入りこんでいなかった。
係員と近しい遺族だけが使う、専用の廊下だった。

あの、大柄な男の姿も、見えなかった。

トイレは、廊下の突きあたり付近にあった。
女の子と二人で、足早に先へ進んでいく。
床にはモノトーンの絨毯が敷きつめられ、足音はいっさいしなかった。

「こっちい」

女の子は、まよわずに、男子便所へ向かった。
言われるまま、女の子を先にして、一緒に個室に入る。
後ろ手に、鍵をかける。

女の子が、手を離して便器に歩みよった。
こちらに背を向けたまま、自分でスカートをまくりあげ、返す手で下着をずらす。
それから、あらためてスカートをまくり上げた。

無邪気で、あられもない動作だった。

女の子の両足が、むき出しになる。
クリーム色の肌が、驚くほど艶やかに見えた。
人形を思わせる、あまりに華奢な両足。

背丈はせいぜい、胸元あたりまでしかない。

便座を前にして、女の子が、こちらに顔を向ける。
やや恥ずかしげに、微笑んでいた。
「だっこしてえ」

尻を突き出すようにして、だらりともたれかかってくる。
慌てて女の子の両脇に、手を差しのべた。
腰の上に抱えあげる。

とても軽い。

青臭い子どもの体臭が、鼻先に、強烈に立ち上ってきた。
喪服の防臭剤と、髪シャンプーの香りが、体臭に混じりあっている。
小さな身体の温もりが、じかに伝わってくる。

その姿勢のまま女の子は、自分の股間の突起を、いじりはじめた。
抱き上げている上から、その指づかいが、はっきりと見てとれた。
細い指先が、幼い突起に、くるくると繰り返しかえしまとわりついている。

「いじったら、でるの。おしっこ」

女の子の息づかいが、微妙に、不規則なものになってきた。
傾げたうなじに、柔らかそうな後れ毛がもつれあっている。
「ううふ・・・あふう」

表情は、まったく見えない。

女の子は、しばらく一心に、突起をいじりつづけていた。
やがて、どこか鼻にかかったような、甘えた声でささやいた。
「・・・でないん」

ささやいて、首だけを、こちらにめぐらせる女の子。
ねだるような目つきで、じっと見あげてくる。
「おじさんが、いじってえ」

体の奥から、異様な衝動が突きあげてきた。
小さな重みが、腕から膝に移る。
女の子を抱えたまま、便座に腰を下ろしていた。

女の子の頬は、いつのまにか紅く上気している。
ふたたび強く、こちらの手を握ってきた。
ぐいぐいと、華奢な股間へ導こうとする。

できないよ、とつぶやいた。
女の子が、さっこちらを振りかえった。
嫌々をするように、むやみに首を振る。

「るいちゃんばかり、ずるい！」

言いながら、思いきり背中を反らせている。
こちらを見あげながら、しきりに身じろぎを続けていた。
ほしいオモチャを得られないときのような、切なげなまなざしだった。

「いじってよう、いじってようう」

・・・できないよ。
少女の要求を拒む自分の声が、まるで読経の声のように聞こえてきた。
「できないよう・・・」

切迫した様子の幼い呼吸音が、その声に混じりはじめる。
「ふっく、うっふ、あっくあっく、うくううう・・・」
呼吸音は、しだいに高まっていく。

気がつけば、幼い少女の突起を、夢中でいじくりまくっていた。

(続く)

・ [Back](#)